

2014. 10. 8 (火)

孤独 vs Belonging

Ruth M. Grubel

皆さん、おはようございます。孤独というのは難しいテーマですね。深刻なものではありませんが、わたしが最近孤独を感じたのは、数年前に、ある専門の方々が集まった会に招かれたときです。関学からも何人か行かれていて、その方たちは知り合いの方がたくさんいらっしゃったので、「あー、久しぶり！」と楽しそうにお話が弾んでいました。ですが、私は顔見知りの方がいませんし、専門が全く違う方たちとどんな会話をすればいいのかかわからず、「今日はいいいお天気ですね」というような挨拶もしにくく、大勢の人がいる中で場違いな孤独を感じました。こんなのは本当の孤独じゃないと言われるかもしれませんが、このような体験は誰でもされたことがあるでしょう。

日本では名刺交換をする機会が多いですが、名刺には所属する組織、役職や担当、氏名が入っています。仕事を退職された後も同窓会や何かの団体で活動されていると、その名刺を持っていらっしゃる方もよくお見かけします。所属する組織があると安心を感じられるのかもしれませんが、日本語の「属する」という言葉と英語の「belonging」とは意味が少し異なるかもしれませんが、とにかく、belongingを感じられない時に、人は

孤独な気持ちになると思います。

詩編 68 篇 7 節に「神は孤独な人に身を寄せる家を与え」とあります。英語の聖書には、「家」を「house」としているものと、「family」としているものがあります。幼い頃は家族 (family) に囲まれながら、「自分はこの family に belong している」と感じながら成長していきますが、いずれ家族と離れる時がやってくるでしょう。ここにも家族から離れて関学に入学するために下宿している人がいるかもしれませんね。始めは本当に辛いと思います。また、就職して家族を持って、単身赴任で家族と別れて住んでいる人は孤独を感じるかもしれません。

一番長いお別れは「死」です。愛する人が亡くなると、残された人は本当に辛くて悲しくて深刻な孤独を感じます。家族を失ったとき、それまでその家族と親しく関わってきた人と付き合うこともつらくなり、さらに孤独を感じるということもあります。悲しい話ばかりするのは良くありませんが、私は母を 8 歳の時に亡くしました。その数日後が母の日で、弟や妹が通っていた幼稚園からカーネーションを付けてくるように言われたので、私たちは白いカーネーションを付けました。そ

のときとても寂しく、孤独を感じたことは今でも心に残っています。

東日本大震災の後、住み慣れた場所から転居しなければならなくなり、自分の土地に帰れない人たちがいらっしゃいます。知らない人たちばかりの土地で新しい生活を始めた人には大きな孤独を感じている方がいらっしゃいます。社会学部は阪神淡路大震災後に様々な調査を行いました。住み慣れた土地から別の場所に移り、環境が違うところで生活するのは、特に高齢者の方々にとっては辛く、孤独と寂しさを感じながら毎日を過ごしている、という結果が出てきました。

Belonging を感じられず、孤独を感じることは他にもあります。国籍が違う、障がいをもっている、性的アイデンティティが違う、経済状況が違うなど、人と違うという理由でいじめられる。このような差別は人に孤独を感じさせます。神は、孤独を感じる人た

ちに family を与え、居場所を与えてくれます。これはとても大切なことです。関西学院は「人と違っていい、多様性を尊重する」という姿勢を明確にするために、昨年「インクルーシブ・コミュニティ構築に向けて」という宣言文を出しました。ひとりひとりが神様の家族なんだということをみんなが意識し、自分と異なる人と関わり、寄り添う努力をする、そういう大学になりたいと思います。

私たちは誰もが必ず孤独や寂しさを感じる時があります。その孤独の体験をぜひ大切にしてください。それによって、自分の周りの孤独を感じている人の気持ちをわかることができます。もちろん皆さんには孤独ではない、belonging を感じる毎日を過ごしていただきたいですが、周りの人たちも belonging を感じられるように努力していただきたいと思います。

(院長・社会学部教授)